様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００３０７

研究課題名（和文）英語翻訳における日本近現代文学の正典（キャノン）形成の研究

研究課題名（英文）A Study on the Formation of the Canon of Modern and Contemporary Japanese Literature in English Translation

研究代表者
榊原　理智（Sakakibara, Richi）

早稲田大学・国際学術院・教授

研究者番号：００３１３８２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は①戦後から冷戦初期という英語翻訳初動期のキャノン形成時代 ②村上春樹の英語翻訳による1980年代以降のキャノン変容という二つの歴史的射程を据え研究をすすめてきたが、いくつかの論文・学会発表などを行うことができた。英国・および米国の大学の研究者たちとの共同でのワークショップ開催も行った。コロナ禍によって海外渡航が制限され、調査に関しては多少の遅れをとったが、規制が緩和されるに伴い、念願であった海外研究者を招聘しての国際シンポジウムを３年目にして初めて行うことができた。また、今後も継続を予定している研究会を立ち上げ、研究者ネットワークを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、日本文学の英語訳を歴史的に捉えるという視点にある。冷戦初期におけるキャノン形成は、日本側の日本文化発信への意欲と、アメリカ側の冷戦文化政策の利害が一致して協働して行われた。村上春樹の成功、およびそれに続く女性作家たちの作品の英語訳ブームはオリエンタリスティックで男性中心であった以前のキャノンへのアンチテーゼを成していることが明確になった。本研究の社会的な意義としては、翻訳の文化構成力への考察が挙げられる。文学の翻訳とは文学の流通そのものであり、目標文化圏での文学的価値そのものを形成することが本研究によって明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research has been conducted from two historical perspectives: (1) the period of canon formation from the postwar period to the beginning of the Cold War, when English translation first began, and (2) the transformation of the canon since the 1980s as a result of Haruki Murakami's English translations. I have also organized workshops in collaboration with researchers at universities in the UK and the US. Although we experienced some delays in our research due to the restrictions on overseas travel caused by the corona disaster, we were able to hold an international symposium for the first time in the third year, inviting overseas researchers, which we had long hoped for, as the restrictions were relaxed. In addition, we established a research group that we plan to continue in the future, and built a network of researchers.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：英語訳　日本近現代文学　翻訳　キャノン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 文学研究における正典（キャノン）とは、その芸術的価値を権威によって後づけられた作品を指す術語であり、近年の研究においてキーコンセプトの一つとなりつつある。国内においては日本文学のキャノン形成のメカニズムに関して夏目漱石や源氏物語などの研究があるが、敗戦以降、日本文学が英語圏のなかでキャノン化されていく際に英語翻訳が果たした役割についてはまだ不明な点が多い。戦後日本が国際社会に復帰していくのに伴って川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫、安部公房らは世界の主要な文学としての価値を認められ、英語圏における日本学の基礎となった。その後８０年代に入ると、村上春樹の英語翻訳が大成功を収めるが、川端・谷崎・三島らとはでは、英訳テクストの生成プロセスや流通・受容の形が明らかに異なっており、このことはキャノンの基準そのものが大きく変容したことを意味しているのだが、村上作品の英語翻訳が国内外にもたらしたものや、それ以前の成功例との違いについても十分に検証されていない。

(2) 上のような状況を踏まえ本研究は、日本近現代文学が英語翻訳を通して世界の主要な文学（キャノン）になっていく過程を、英語翻訳の生産・出版・流通の側面から解明することを目的とし、1) 英語翻訳初動期のキャノン形成　2) 村上春樹の英語翻訳によるキャノン変容という二つの研究領域を視野に入れていた。

２．研究の目的

(1) 戦後から 90 年代にかけて、日本近現代文学が英語翻訳を通して世界の主要な文学（キャノン）になっていく過程を、英語翻訳の生産・出版・流通の側面から解明する。

(2) 本研究は、1) 英語翻訳初動期のキャノン形成 2) 村上春樹の英語翻訳によるキャノンの変容の二つを中心に据えることで、日本金原文学研究に英語翻訳という新たな通史的な視野を拓く。

３．研究の方法

(1) 上記の 1) の領域に関しては主に榊原と塩野が担当し、川端・三島・谷崎といった成功例だけでなく、成功しなかった事例についても詳しく調査することとした。敗戦直後から始まった英訳出版事業に関して、失敗例を多く含んだ実践を詳しく調査分析する。どの作家がどういう経緯で翻訳に値するとして選ばれ、どのような人物が翻訳者となったのかを、同時代の出版流通機構に関する基礎資料を収集し、かつ英語翻訳のテクスト分析を加えて比較分析も行いつつ解明する。とくに、冷戦初期という歴史的状況との関わりを重視し、現在英語圏ではほぼ忘れ去られている通俗小説の英訳作品や左派系作家の英訳作品の掘り起こしも積極的に行う。

(2) 上記の 2) の領域に関しては主に辛島が担当し、英語圏での翻訳者や編集者へのインタビューを通して、村上春樹またそれに続く新しい日本の現代作家たちの翻訳出版事情を調査する。村上春樹はデビュー以後、国内では通俗的な作家とみなされたが、80 年代に英語翻訳が成功したことでその評価に大きな変化が生じた。その評価は、村上春樹に続く作家として、川上未映子、川上弘美、村田沙耶香といった女性現代作家にも受け継がれ、新たな翻訳者を英語圏で輩出することにもなった。新しい翻訳の評価基準がどのように作られたのかをインタユー資料をもとに分析する。

(3) メンバー全員が定期的に研究会を行い、調査結果を交差させながら歴史的視座の構築を目指す。

４．研究成果

(1)

初年度となる 2019 年には 1) 2) のそれぞれの領域で成果を挙げた。

a.まず 1)の研究領域に関しては塩野がユネスコによる日本文学作品の英語翻訳選定過程に関する調査の結果を論文として発表した（「ユネスコによる日本文学代表作品翻訳計画――その成果と課題」）。また、榊原が中心となって英国在住の研究者と国際ワークショップ「文化の翻訳」を開催し、そこで榊原が 1950 年代の日本文学作品の英語訳について、1954 年に出版された雑誌 Atlantic Monthly の「日本特集」の編集を担った翻訳者のエドワード・サイデンステッカーの関与を含めて発表した。この一連の研究によって、日本の文学者が主導した日本発のユネスコ翻訳事業と、アメリカの冷戦文化政策の色濃い Atlantic Monthly 誌周辺の出版人・翻訳者たちの事業との共通点が明らかになった。双方ともに、政治的な意味合いを持つ作品への評価を微妙に調整しつつ、日本の伝統的な文化を引き継ぐものとして川端や谷崎の作品を規定し前景化する動きが見られた。

b.次に 2)の研究領域においては、辛島が英国において、ペンギン・ランダムハウス社やグランタブックスなど日本現代文学の翻訳を出版している 5 社に聞取り調査を行った。辛島はその調査に基づき、オックスフォード大学で開かれた「現代文学と翻訳」の座談会、及び早稲田大学における国際シンポジウム「村上春樹と国際文学」に参加している。また新しい視点として、村上春樹とはまた別の形でキャノン化されつつある多和田葉子作品を取り上げる必要性を感じ、2)の領域を拡大して多和田葉子研究を入れ込んだ。榊原がこの方向性での論文「多和田葉子『地球にちりばめられて』論―「母語の外」とはどこなのか」を学術誌に発表した。多和田葉子はドイツ語でも作品を発表するのみならず、小説テクスト上で多言語を駆使する点で村上春樹や他の現代作家たちとは一線を画している。翻訳行為自体を小説テクスト上で主題化する作家であるという点で「生まれつき翻訳」である。こうした特徴的な現代作家も今後視野に入れることで 2)の研究領域がさらに充実することが確認された。

(2)
２年目となる 2020 年度においては、コロナ禍の影響で当初予定していた米国での資料調査および国内での閲覧制限などで思うような調査ができなかった。特に 1)の領域の資料調査が滞ってしまったが、2)の領域を中心にこれまでの資料を基盤とした発信を行なった。
a.主な成果としてまずは辛島の単行本『文芸ピープル　「好き」を仕事にする人々』（講談社）の出版が挙げられる。英語圏において日本の現代女性作家の翻訳が次々に出版され、新しい日本現代文学のキャノン化が行われていることを論じており、学術書ではないが本研究の基盤となる問題意識を提示し、次年度以降の本研究の方向性を明確にするものである。また、これらはエッセイの形で文芸雑誌『群像』にも掲載されている（「英語圏で読まれる現代日本文学」及び「新しい「日本文学」を編む海外編集者たち」)。また辛島は著者として海外の二つのオンライン雑誌からインタビューを受け、それを発表しているほか、英国イーストアングリア大学、オックスフォード大学主催のオンラインでのワークショップに参加して発表を行なっている。榊原は、多和田葉子とリービ英雄についての小文を寄稿し 2021 年刊行された（『日本文学の見取り図』)。

(3)
３年目となる 2021 年度においては、塩野を中心にコロナ禍で滞っていた 1)のユネスコ関係の資料調査を継続するとともに、辛島と榊原がそれぞれ２）の領域における発表を行なった。
a.辛島は 2)の領域において日本の現代作家の翻訳者 6 名にインタビューを行い、その領域における成果を日本の文芸誌に寄稿するとともに、早稲田大学国際文学館のサイトおよび海外のシンポジウムにおいて英語で口頭発表している。榊原は大東文化大学日本文学会春季大会において「翻訳が開く扉−日本文学の英語翻訳を考える」と題した基調講演を行った。学生向けに、通常我々は日本語で日本文学が書かれていることが当たり前だと思っているが、英語に翻訳された際にどのような問題が発生するか等に関する発表を行なった。本研究の問題意識を一般に広めることができたと考えている。また、ハワイで開催されたシンポジウムに Zoom 参加し、台湾出身の現代女性日本語作家である李琴峰を「生まれつき翻訳」の作家として取り上げ、多和田葉子と比較した発表を行なった。
b. 2021 年の特筆すべきこととしては、最終年度に向けて日本文学の英語翻訳のキャノン化についてのシンポジウムを企画しているが、その下準備として「翻訳と文学」研究会を立ち上げ、10 月 30 日に第一回の研究会を行った。佐藤ロスベアグ・ナナ編『翻訳と文学』に寄稿した林圭介氏を招いて氏の論文「五つの「ぼく」たちー村上春樹文学を世界文学に変える『図書館奇譚』」について意見交換を行なった。

(4)
4 年目となる 2022 年度においても、1)　2)の領域ともに大きく研究を進めることができ、かつ、双方の領域を交差させる視座についてもさまざまな研究者との交流を通して固めることができたと考える。
a.まず大きな成果として、安部公房の翻訳者としても知られるニューヨーク市立大学のリチャード・カリチマン教授を招いて、翻訳理論としても応用できる安部公房の境界に関する哲学的な思考の紹介していただくことができた（国際シンポジウム「アカデミアにおける文芸翻訳」)。コメンテーターには、占領期・冷戦初期の日本文学英語翻訳について資料研究を行っておられる片岡真伊准教授（現在国際日本文化研究センター所属)、『生まれつき翻訳』の翻訳者である吉田恭子教授（立命館大学)、本学の国際教養学部の翻訳理論の専門家であるペドロ・エルバー教授を迎えた。安部公房は戦後の英語訳によってキャノンとなった作家だが、カリチマン氏が近年翻訳したような作品については見過ごされており、そういう現象を歴史的・実証的に検証するとともに、理論的にも解明するようなシンポジウムとなった。
b.現代作家の翻訳との関わりについても、辛島が川上未映子、村田沙耶香といった現代女性作家の英語翻訳によるキャノン化と村上春樹との関係性について英国で研究発表を行なったほか、榊原も多和田葉子と李琴峰に関する研究発表を昭和文学会で行なった。

(5)

一年の延長申請を行い、最終年度となった 2023 年には、資料収集を継続するとともに研究会を拡張し、アメリカのアジア学会に研究出張を行って英語圏における翻訳研究者との交流をはかった。

引用文献

レベッカ・ウォルコウィッツ著、吉田恭子他訳『生まれつき翻訳：世界文学時代の現代小説』

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 辛島ディヴィッド	４．巻 9
２．論文標題 川上弘美と七人の英訳者たち	５．発行年 2021年
３．雑誌名 群像	６．最初と最後の頁 48-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 辛島ディヴィッド	４．巻 6
２．論文標題 「英語圏で読まれる現代日本文学」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 群像	６．最初と最後の頁 124-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 辛島ディヴィッド	４．巻 12
２．論文標題 「新しい「日本文学」を編む海外編集者たち」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 群像	６．最初と最後の頁 340-368
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 榊原理智	４．巻 68
２．論文標題 多和田葉子『地球にちりばめられて』論--「母語の外」とはどこなのか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本文学	６．最初と最後の頁 44-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　2件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 榊原理智
２．発表標題 越境的思考のゆくえ－李琴峰と多和田葉子
３．学会等名 昭和文学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 榊原理智
２．発表標題 「翻訳が開く扉－日本文学を翻訳から考える」
３．学会等名 大東文化大学日本文学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 榊原理智
２．発表標題 “Politics of Sexuality: Representations of Borders in Ri　Kotomi’s Novels”
３．学会等名 An International Conference on New Directions in Japanese Literary Studies（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 辛島デイヴィッド
２．発表標題 “Repackaging Japanese Authors for the Anglophone Sphere in the 21st Century: Murakami, Kawakami, Murata and Beyond”
３．学会等名 Oxford University Nissan Seminar（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 辛島ディビッド
２．発表標題 "Who We ’ re Reading When We ’ re Reading Murakami"
３．学会等名 BCLT Research Seminar British Centre for Literary Translation, University of East Anglia, UK（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 辛島ディビッド
２．発表標題 "Translating Haruki Murakami"
３．学会等名 Oxford Comparative Criticism and Translation, The Oxford Research Centre in t he Humanities and St. Anne ’ s College, Oxford University, UK
４．発表年 2021年

１．発表者名 辛島ディビッド
２．発表標題 Murakami Haruki
３．学会等名 Contemporary Japanese Literature and Translation（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 榊原理智
２．発表標題 冷戦と翻訳―近代日本文学の英語訳のキャノン形成をめぐ って
３．学会等名 国際ワークショップ『文化の翻訳』（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 塩野加織
２．発表標題 1950年代のユネスコ文化事業と翻訳
３．学会等名 国際ワークショップ『文化の翻訳』（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

１．著者名 榊原理智（寄稿）	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 266
３．書名 日本文学の見取り図 宮崎駿から古事記まで	

１．著者名 辛島ディビッド	４．発行年 2021年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 226
３．書名 文芸ピープル　「好き」を仕事にする人々	

１．著者名 榊原理智	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 250
３．書名 日本文学をひらく	

１．著者名 塩野加織	４．発行年 2020年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 226
３．書名 越境する歴史学と世界文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

辛島デイヴィッドの業績の一部は以下のWEBサイトに発表されている。
早稲田大学国際文学館アネックス
https://www.waseda.jp/inst/wihl-annex/interviews-en

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	辛島　デイヴイツド (Karashima David) (40736005)	早稲田大学・国際学術院・教授 (32689)	
研究分担者	塩野　加織 (Shiono Kaori) (80647280)	大妻女子大学・文学部・准教授 (32604)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 アカデミアにおける文芸翻訳：研究と翻訳の接点	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 国際ワークショップ「文化の翻訳」	開催年 2020年～2020年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関